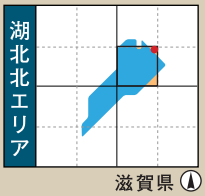
史跡
県指定

西野水道（にしのすいどう）

高月町西野　昭和59年3月30日指定



近江の「青の洞門」とも呼ばれる西野水道は、度重なる余呉川の氾濫により大きな被害を受けた西野の村民が、西野充満寺住職西野恵荘の発案と指導のもとに、農民が中心となって天保11年（1840）から6年の歳月をかけて完成させた排水用の岩穴で、水利史上ばかりでなく、江戸時代の民衆史を考えるうえでも重要な遺跡です。

当時のできごと	
1832年	この年各地で飢饉
1840年	アヘン戦争勃発
1845年	イギリス艦長崎に来航

余呉川と西野水道

西野の集落は、高月町西部の西山のふもと、余呉川の中流部にあり、北と西は賤ヶ岳山系の尾根が琵琶湖に沿って延び、余呉川の氾濫水や、近くの村の雨水は、ことごとく西野の低地に流れ込んで溜まる状態でした。そのために、大雨の度、700反余りあったという西野の水田は水に浸かり、度々大きな被害を被ってきました。天明3年（1783）、天明7年（1787）、天保7年（1836）に西野は相次ぐ大洪水と大飢饉により、壊滅的な状態となります。この惨状を救うために、西野充満寺住職西野恵荘は、西野の山を刳り抜き水道を造って、余呉川の水を琵琶湖に流すことを発案します。

恵荘の指導のもとに、村民が主体となり、彦根藩と、時の大老井伊直亮を始めとする江戸表の理解と援助を受け、天保11年（1840）7月29日に着工し、石工の挫折と交代、村民の意気の衰え、生活の困窮、落盤事故など数々の困難を乗り越え、弘化2年（1845）9月1日に完成を見ました。



西野水道入口



西野水道の位置（水道の横切る尾根が古保利古墳群）

水道の構造

岩盤を刳り抜いて造られた水道は、全長約220m、高さは約1.5～3m、幅は約1～1.5mの規模です。地質は粘板岩が主体となり、途中で2カ所ほど約10mの幅で砂岩層が混じり、所々に固いチャート層が混在します。記録によると、石工達が用いた道具は、玄能、鶴首、鍬、カネノカツヲ、カナテコその他諸道具とあります。磁石で方向を確認し、水盛で勾配を調整しながら掘り進みましたが、途中で何度か方向やレベルを調整した跡がうかがえます。

［工事に要したもの］

工事は、始め能登の石工が受け持ちましたが、固い岩盤に当たり断念。その後、伊勢の石工に代わり、完成を見ることができました。この間に要した手間と費用は、石工延べ5289人、村方人足約3500人、他村からの弁当持参手伝い120人以上、経費の総計は1275両2分3朱3匁2分5厘と記録されています。これらの賦役や費用は100戸ほどの西野の農家が負担し、この捻出のため田畑山林のほとんどが売り払われたと伝えられます。



西野水道内部



西野水道内部



右のアーチが昭和55年開通放水路　中央の四角が昭和25年開通放水路
左の四角が西野水道出口

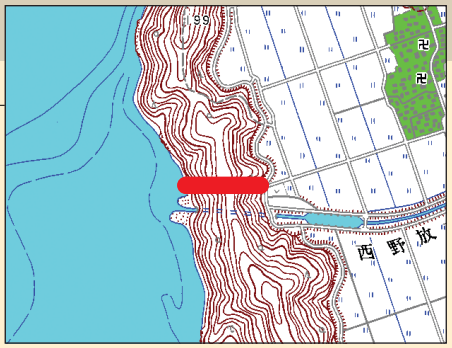
関連する文化財

青洞門（大分県本耶馬渓町）	禅海和尚が人力で掘った隧道。菊池寛の「恩讐の彼方に」のモデルとなる
古保利古墳群（高月町）	学習シートNo.037

もっと深く知りたい

高月町教育委員会　☎0749-85-3111　伊香郡高月町渡岸寺160

西野水道へのアクセス　ＪＲ北陸本線　高月駅下車
北陸自動車道　木之本インター



【参考文献】〔近江の遺跡〕（財）滋賀県文化財保護協会

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課　平成16年3月